

## 原爆の凶丸木美術館における「爆撃の記録」

2016年に東京都現代美術館で開催された「MOT アニュアル 2016 キセイノセイキ」展に、藤井光は《爆撃の記録》という作品を出品した。東京大空襲の戦災資料をあつかった展示であったが、展示空間には、真っ白な台座や展示ケースが整然と並び、丁寧なキャプションが添えられていたものの、肝心の遺品や文書などの展示物はまったく存在せず、ぽっかりとした空間に、空襲体験者が展示作業を手伝いながら戦争体験を語る映像が流れていた。

なぜそこに展示物が存在しなかったのか。

1990年に東京都は、東京大空襲のあった3月10日を「東京都平和の日」とする条例を制定。1992年には「東京都平和記念館基本構想懇談会」が発足、1994年に「東京都平和祈念館（仮称）基本計画」が発表された。しかしバブル経済崩壊による財政難に加え、空襲にいたる歴史的経緯を解説する展示（「軍事都市東京」との言葉や、重慶爆撃などアジア侵略を示す内容）が右翼議員の攻撃を受け、石原慎太郎知事のもと1999年に予算の執行は凍結された。計画中に広く一般に呼びかけて収集された5000点を超える遺品や文書資料、空襲体験者330人の証言映像は、今も都内の倉庫に保管されたままになっている。

過去に区市町村への一部資料の貸出例はあったそうだが、「キセイノセイキ」展の際に藤井が東京都現代美術館を通じて資料の貸出を要請したところ、歴史認識をめぐる紛争に焦点を当てた内容が警戒されたのか、「個人の要請では貸せない」との理由で断られたという。

1980年代は、東西冷戦の緊張状態を背景に、世界的に反核・反戦運動が広がった時期だった。丸木位里、丸木俊の共同制作「原爆の凶」の展覧会も、毎年各地で市民による実行委員会形式によって開催された。当時の出品作を調査すると、朝鮮人被爆者を題材にした第14部《からす》がもっとも多く展示されている。つまり原爆／戦争体験を被害だけで見るのではなく、アジア諸国への加害責任を視野に入れ、「再び加害者にならない」という認識を立ち上げることが重要視されたのだ。東京都平和祈念館の構想も、基本的にこの流れに立脚する。しかし1990年代には、逆に加害の記憶を「自虐史観」と封じる日本会議などの勢力が

台頭した。東京都平和祈念館の凍結は、この影響が直撃したのである。

藤井は、歳月とともに忘却されつつあった問題を、「不可視化」された展示物を「可視化」することで、私たちのもとに呼び戻した。そして今回、原爆の凶丸木美術館で展示される《爆撃の記録》は、「東京都平和祈念館」の計画文書作品として開示している。

- A. 東京空襲 B. 語り継ぐ戦争体験 C. 核時代と大都市
- D. 平和を脅かす今日の問題 E. 平和の願い
- F. 東京空襲に至る道映像シアター G. 空間（証言・体験者・交流等）

このようにテーマ分けされた展示室の見取り図や、展示内容の一覧表などの資料によって、いまだ「凍結中」の構想はリアリティをもって立ち上がる。特筆されるのは、展示施設の中央を横断し、すべての展示に接続する「G. 空間」だ。

裁断された資料のあいだに生じた空白を見ながら考える。証言映像や体験者との交流を重視する構想は、戦争体験の「記憶の継承」の必要性がうたわれる現代において、とりわけ重要な意味をもつものではなかったか。体験者から寄贈された膨大な資料や貴重な証言映像（ビデオテープの劣化は気になる）を、このまま埋もれさせてよいのだろうか。

岡村幸宣（原爆の凶丸木美術館学芸員）

### 展覧会情報 特別企画 藤井光 爆撃の記録

会期：2021年5月1日～6月13日

会場：原爆の凶丸木美術館

設営協力：佐藤翔 寺田鵬弘 山本光信 川田淳

企画協力：居原田遥

展示情報：<https://marukigallery.jp/4261/>

## 記録の問題

藤井光に丸木美術館での展覧会開催を相談したのは2年程前のことだ。5月5日は丸木美術館の開館記念日であり、例年、新緑鮮やかなこの時期の美術館では穏やかで賑やかな催しが行われる。改装したての2階のアート・スペースを使い、これまで丸木美術館では取り上げる機会の少なかった映像作品の特別企画を、開館記念日を含む連休中に開けないか。岡村学芸員からのこうした相談をきっかけに、アーティストの提案をすることになった。その初回を終え、2年目の企画を考える中で真っ先に思いついたのが、藤井光だったのだ。しかし、その後の新型コロナウイルスの蔓延により、やむを得ず予定は一年後まで延期され、現在の開催に至る。

藤井光に丸木美術館で展覧会を持ちかけた理由は2つある。ひとつめは、他でもない藤井の表現活動における姿勢の強さである。災害、歴史認識、労働問題。作品を通して現代社会が抱える諸問題を躊躇なく告発し、その解決策を提案する。時には作品制作だけには留まらない藤井光の活動と実直な姿勢は、丸木夫妻の作品を大切に思う人に共感を生むと感じた。

そしてもうひとつは、丸木美術館という展示空間が持つ強力で固定化されたイメージに対し、問題提起のあり方の更新ができるのではないかと考えたからである。原爆を含む戦争、そして水俣病や南京大虐殺。数々の人災の悲惨さと被害者の姿を描ききった丸木夫妻の表現の威力は凄まじい。表現や美術に取り組む者にとって、さらにその表現を用いることで戦争をはじめとする社会問題に挑む者であれば、この作品群には大きな尊敬の念を抱くはずだ。一方で、あまりに強力なイメージが突きつけられ続ける丸木美術館での鑑賞経験は、時としてそれらの人災における当事者性や加害者性を忘れさせてしまうことがありうる。もちろん、丸木夫妻の作品には戦争の加害者性を上げたものもあるが、巨大なスケールで戦争の悲惨なイメージを突きつけ続ける展示空間の経験はあまりに強烈で、加害者性／当事者性への気づきや、その気づきに伴って覚えるはずの感情が飲み込まれてしまう。

丸木美術館をはじめとした戦争の歴史や記憶の継承をめぐる平和運動は、旧来的な左翼的運動のなかで展開してきたものだ。近年の分断化された政治運動への嫌悪感の広がりや、決してそうした分断に安易に回収されるべきではないはずの「戦争の

記憶の継承」という社会課題への空虚な空気の蔓延にも、表れているような気がしてならない。丸木夫妻の表現そのものと、この美術館を存続させるという運動をさらに後世に繋いでいくために、私自身が、この不明確なアンビバレンスに対する、問題提起の更新も含んだ新しい提案を探り続けている。

藤井光の作品は、上述したような社会的な諸問題を取り上げる明確な姿勢を示すとともに、それを取り上げた藤井自身を含む「見る側」の当事者性／加害者性を滲ませる。それは抉り取るような感情を突きつけるはずだ。長くなってしまったが、藤井に企画を提案した意図はこの通りである。

展覧会開催に至るまでにはいくつかのアイデアがあがったが、最終的に藤井が選んだのは、この《爆撃の記録》だ。《爆撃の記録》は、1990年代に構想されたものの、実際の設立には至らなかった「東京都平和祈念館」の設立構想と、そこで展示されるはずだった東京大空襲にまつわる数々の資料記録そのものである。本作品が最初に発表された「キセイノセイキ」展（2016、東京都現代美術館）は表現に対する様々な「規制」に焦点を当て、多くのアーティストによって検証と解決が取り組まれた意欲的な企画だった。しかし思えばその後、「あいちトリエンナーレ」を取り巻く一連の出来事が示したように、表現規制をめぐる状況は一向に解決されていない。さらにはコロナ禍という世界的な社会変容もまた、表現の自由を脅かすことにつながる気がしてならない。発表から数年たった現在であっても、《爆撃の記録》が当時と変わらず（むしろ強化された）問題提起として機能すること自体を、今一度新たな警鐘として受け止めるべきである。

また、本展の《爆撃の記録》は、2016年当時の内容と比べ、公開が叶わないものたちの経緯と詳細が明らかにされている。驚くべきは、設立されるはずだった祈念館構想の具体性である。なかでも、そこで目にし、耳にすることができるはずだった証言の数々は、この場で想像し得る以上に、然るべきかたちで記録されるべきだ。

《爆撃の記録》は残していかなければならない。とはいえ、この展示室に提示されているのは、圧倒されるような強力なイメージではなく、「未だに」開示可能である範囲の記録のための空間である。なにより、この空間が眩いほどに突きつける記録の問題こそが、新たに引き受けるべき明確な課題なのだ。

居原田遥（本展企画協力）